

Contents

福井の宝 島田墨仙展	[2~4]
所蔵品によるテーマ展	[5]
イベント報告	[6]
特別寄稿 驚きの福井	[6]
〈コラム〉楷文「勝以」印の使用期間について	[7]
福井県立美術館館蔵品紹介	[7]
お知らせ・貸館情報	[8]
福井県立美術館 春の展覧会案内	[8]

表紙：島田墨仙 「山鹿素行先生」(部分) 東京国立近代美術館蔵





鳥田雪谷 「桜花群禽図」
福井市立郷土歴史博物館蔵

第一章

「福井生れの武家育ち」

墨仙に武士気質の教育を受け、それからの人生に深い影響を与えた父雪谷と、墨仙同様画家を目指した兄雪湖の作品を紹介します。

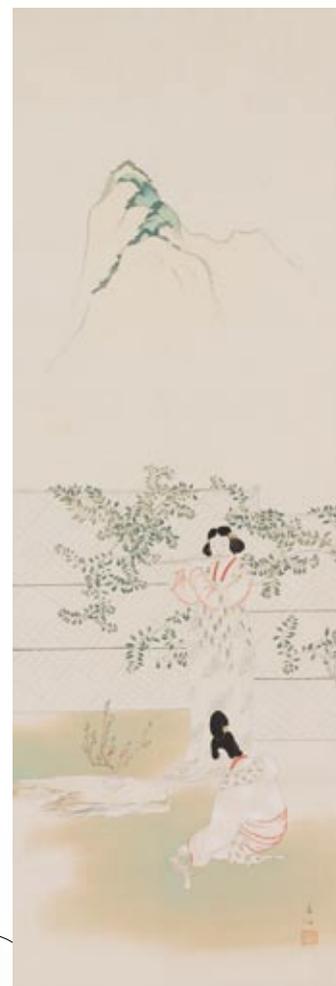


鳥田墨仙 「大石良雄の致城帰途の図」
ふくい藤田美術館蔵

第二章

「生涯の師との出会い」

橋本雅邦という最良の師を得て絵に込める精神性を学んだ墨仙が、キリストや釈迦、孔子など東西の先賢の肖像を描くことに取り組んだ明治から大正にかけての作品が中心です。



鳥田墨仙 「春興」
個人蔵

第三章

「画中に遊ぶ 清涼なる世界へのいざない」

三十八歳で再び東京に戻ってきた墨仙は、謹厳で力が入った作品を発表する一方で、少年時代から親しんだ漢籍や故事の高士雅人の穏やかでほのぼのとした姿も好んで描くようになります。第三章では大正から昭和期における多彩な表現の一つである、作家自身が画中に遊ぶかのような墨仙の清涼な世界を体感してください。

福井の宝

鳥田墨仙展

平成23年3.4^金→3.27^日

休館日◎3月14日(月)

開館時間◎午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

観覧料◎一般800円、大高生500円、中小生300円

(30名以上の団体は2割引)

身体障害者手帳所持者とその介護者1名半額

(但し、障害者手帳に介護印のある方のみ)

主催・会場◎福井県立美術館

後援◎福井市教育委員会、福井新聞社、NHK福井放送局、FBC福井放送、福井テレビ、FM福井、福井ケーブルテレビ株式会社・さかいケーブルテレビ株式会社

島 田墨仙(1867-1943)は日本画部門初の帝国芸術院賞受賞者であり、歴史人物画の第一人者として名を馳せた福井出身の日本画家です。福井藩士・島田雪谷の次男として福井城下に生まれ、9歳頃から父雪谷に就いて四条派を学び、満28歳の時に上京して橋本雅邦に師事します。雅邦から受けた指導と感化、福井藩士の家に生まれた誇り、さらには隣家に住んでいた幕末の偉人・橋本左内に対する敬慕の念などが支えとなり、墨仙の彩管からは威厳に満ちた幕末勤王の志士や先哲聖賢の名作が数多く生み出されていきました。文展や帝展を中心に活躍し、精神の充実した格調の高い画風が評価され、昭和17年度第5回新文展出品作「山鹿素行先生」では帝国芸術院賞を受賞しています。

「山鹿素行先生」や「塙保己一」といった墨仙の代表作や大下図、資料など約110点で構成する本展は、これまでごく一部の美術愛好家だけにしか知られていなかった墨仙の画業を多くの方々に知っていただくとともに、墨仙同様画家であった父雪谷、兄雪湖も含めた島田家の画系の全容を紹介する没後初の大規模な回顧展です。なお、本展は5つの章で構成します。

《関連企画》

- ◆親子歴史ワークショップ.....
「墨仙展で橋本左内の時代を知ろう」
日時：平成23年3月12日(土)
午後2時より
講師：福井市立郷土歴史博物館学芸員
福井県立美術館学芸員
※要申込(詳細は県立美術館までお問い合わせ下さい)
- ◆担当学芸員によるギャラリー・トーク.....
平成23年3月19日(土)、21日(月・祝)
※各日とも午後2時より会場にて(要チケット)
- ◆講演会.....
「島田墨仙と近代の日本画」
日時：平成23年3月20日(日)
午後2時より講堂にて(聴講無料)
講師：塩谷純氏
(東京文化財研究所 企画情報部文化形成研究室長)



島田墨仙 「塙保己一」
東京藝術大学蔵



島田墨仙 「藤田東湖と橋本左内」
東京国立近代美術館蔵

第四章

「歴史人物画の大家として」

昭和に入った頃から墨仙は日本の幕末勤王の志士たちを始めとした実在人物の肖像画を描くことが多くなってきました。日本画部門初の帝国芸術院賞を受賞し、名実ともに歴史人物画の大家となっていくまでの墨仙の作品を紹介します。



島田墨仙、島田雪湖、久保田米偃、
ヘンリー・P・ブイ、西川桃嶺、田中一華 合作
「魚類図」
個人蔵

第五章

「雪湖とアメリカ 帝国主義と博物学」

アメリカの海洋調査船に乗り込んだ兄雪湖の博物学の仕事について紹介するとともに、日露戦争後、台頭してきた排日感情の高まりの中、一貫して日本擁護に立ったヘンリー・バイク・ブイとデイビッド・スター・ジョーダンという島田兄弟とは極めて縁の深かった二人のアメリカ人について紹介します。

島田墨仙展の資料収集を行う過程で昨年10月、料理愛好家平野レミさんにお会いしお話を伺いました。レミさんは本展第五章で紹介するヘンリー・バイク・ブイのお孫さんに当たる方です。(聞き手:学芸員 佐々木美帆)

—ブイさんが島田兄弟から日本画を教わった方ということは以前から知っていましたが、レミさんのホームページにブイさんの茶室が紹介されているのを見て、私、今年2月に訪問してきました。カリフォルニアで茶室と日本庭園を見ることができるとは驚きでした。

レミさん●私もそうでした。お祖父さんが広大な土地を手放した後、色んな人の手に渡ってからは風景も随分様変わりしたようだけど、あそこだけはパデューニさんという今の持ち主が、お祖父さんの建てたままの姿で大事に保存して、庭も手入れしてくれていましたから、今は文化財指定を受けて壊せないようになったんです。

—ブイさんは長く日本にいらしたとき、当代一流の画家たちに絵を随分描いてもらっていたようですね。久保田米僊を始めとする近代日本画から土佐、狩野派など古今の日本画までの膨大なコレクションがあったと聞きますし、日本の楽器や刀類も相当あったみたいですね。

レミさん●そうなんです。ベートーベンの交響曲第五の原譜も持っていたそうです。どこへ行ったのか分らないけれど、浮世絵もすごいコレクションがあったそうです。私はお祖父さんのことはよく知りませんでした。父(詩人で仏文学者の平野威馬雄氏)は、アメリカが嫌いで、全然祖父のことを話してくれなくて。和田さん(夫で、イラストレーター、映画監督の和田誠氏)と結婚したとき初めてサンマテオにお祖父さんの墓があるから行ってくるといいよって父が言ってくれたんです。でもサンマテオの

どこだか分からず車であちこち巡っていたら遠くに尖塔が見えて、そちらに車を向けたら、そこにはお城みたいな大きなお祖父さんのお墓があったんです。

それからはお祖父さんのことがもっと知りたくて、テレビで呼びかけて北米人武威と署名が入っている絵を探していると言ったら、あちこちから作品が集まりました。パデューニさんをお願いしてサンマテオの茶室で展覧会を開いたら、2000人以上の人が来てくれたんです。

—そもそもブイさんはどうして日本画を学ぼうとされたのでしょうか？

レミさん●お祖父さんは日本に来る前にまずフランスへ行ったんですね。当時ヨーロッパはジャポニズム全盛期で、そこです



平野家で代々大切にされている島田雪湖の絵。左はレミさん

かり日本美術に魅せられてしまっただけなんです。こんなに素敵なものを作る日本という国に行ってみたくて、実際に行ったら、すぐ大好きになったんですね、きっと。—ブイさんは日本美術をアメリカ西海岸地域で広める役割も果たされていますね。「On the Laws of Japanese Painting(日本画の描法)」という、島田雪湖の挿絵の入った本も出版されておられました。

レミさん●この本はアメリカのある美術学校で教科書になっていると聞きました。ここに描いてある二本の筆の使い方、二本の筆を指にはさんで、一本の筆でかき(限取

り)をつけ、同時にもう一本でスーッとぼかすやり方なんてアメリカ人には思いもつかない方法だと思いますね。

—ところでブイさんは、随分いい家柄の方だったようですね。セオドア・ルーズベルト大統領や、日本の上流階級と付き合いがあり、明治天皇からは旭日勲二等をいただいたとか。また血統的にはナポレオン皇妃ジョセフィーヌとも関係があったと伺いましたが。

レミさん●ブイ家の母方の方がそうなんです。もともとはスコットランドの貴族の出身で、家に伝わるタータンチェックの柄があるんです。ブイ家の勇敢な一人がアメリカに渡り、メリーランド州の名家となって州知事が二人も出ました。そしてそこからさらにもう一人がゴールドラッシュの時期、カリフォルニアに移って行ったというらしいです。

—まだ大陸横断するのも大変な時代だったでしょうに、ブイ家は本当に冒険心に溢れた一族なのですね。

レミさん●そのカリフォルニアのブイ家の9人兄弟のうちの3人が日本に来て、1人は長崎のグラバー邸近くの、1人は横浜の外国人墓地に眠っていて、もう1人はカリフォルニアのサンマテオに眠っているお祖父さんというわけです。

—親日家で大富豪のブイさんのおかげで雪湖は教授料を随分もらって生活も楽だったようですし、アメリカに渡ってからも豪邸に住まわせてもらって、客人待遇を受けたということです。日本美術の講演会の際には実演者として引き立ててもらったり現地の排日感情からも庇ってもらうなど、日本国民としては感謝すべき大恩人ですよ。今日は長時間、貴重なお話をいただき大変ありがとうございます。

レミさん●展覧会が開かれると聞いたら、お祖父さんや雪湖さん達はきっと喜んでしょうね。

—いい展覧会になるよう頑張りたいと思います。

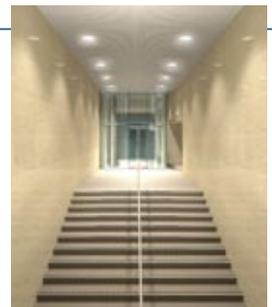
3月4日から当館でエレベーターが稼働します

当館では昨年12月から第1展示室と第2展示室の間の休憩室を設置場所としてエレベーター新設工事を行ってきましたが、いよいよ完成間近となり、3月4日の「島田墨仙展」開幕日に合わせてエレベーターを稼働させる予定です。

昭和53年の開館以来、利用者の皆様には大変ご不便をおかけしましたが、今後はバリアフリーの行き届いた当館にて各展示場での催しを心ゆくまでご鑑賞ください。



1F



2F

(写真はイメージです)

新収蔵品展③

写真家 土田ヒロミの世界

2011年2/25(金)～3/27(日) 休館日：2/28(月)、3/14(月)

会場○福井県立美術館 第1展示室

開館時間○午前9時～午後5時 (入場は午後4時30分まで)

観覧料○一般・大学生 100円 (団体30名以上は2割引)

※高校生以下の方・70歳以上の方・障害者手帳等をお持ちの方は無料

※「島田墨仙展」開催期間中は同展チケットにてご覧になれます



「KU」シリーズ (1962年頃)



「俗神」シリーズ (1968-1975)



「砂を数える」シリーズ (1975-1989)



「団地」 (1973年頃)



「合わせ鏡」シリーズ (1975年頃)



「パーティー」シリーズ (1980-1990)



「新・砂を数える」シリーズ (1995-2004)



「ヒロシマ三部作」



「Aging」 (1986-2006)

土田ヒロミは、福井県南越前町(旧今庄町)出身の日本を代表する写真家です。1960年代末から、日本の土俗的な文化、ヒロシマ、高度経済成長、バブル経済などのテーマにより、変貌する日本の姿を撮り続けています。そのユニークな視点と斬新なスタイル、写真表現を大胆に切り開き、これまでにない日本の時代と人々を表現してきました。

写真の「徹底的な記録」に踏みとどまることで、表現が高い倫理性を獲得する作品群とともに、近年はデジタル技術を積極的に活用して、写真の「記録性」を揺さぶる表現にも踏み出しています。2008年には、長年の功績が高く評価され、第27回「土門拳賞」を受賞しました。本展では、昨年度当館が収集した100点を中心に、テーマごとに土田ヒロミの写真を紹介します。

関連
イベント



作家と語ろう！ —土田ヒロミのギャラリートーク—

◎3月6(日) 14:00～

作家本人が会場で作品を紹介しながら、創作の秘話を明かします！参加者との対話も重視しながら進めたいと思います。ぜひご参加ください。

※本展観覧料が必要です

※「島田墨仙展」チケットをお持ちの方は無料で入場できます

展覧会によせて
—作家からのメッセージ—

最初に、私が写真に出合ったのは、福井大学の一回生の時です。そして卒業の頃には無謀にも「将来、カメラマンになりたい」と考えるようになっていました。そのためには、何としても東京に出なければと故郷を後にして、ちょうど半世紀ほどになります。いろいろな幸運に恵まれ、ここに来て、ようやく写真家として認知されるようになったのではないかと考えています。そして、この度、私の作品が福井県立美術館にコレクションというかたちで里帰り出来る幸運をいただきました。

このコレクションは、大学卒業を間際にしての処女作「KU」から始まる己のアイデンティティを探す旅路を、時間に沿って構成した内容となっています。福井という風土に育まれた資質が、それぞれの作品に反映されているに違いないと思っています。そんなワタシを、多くの方に探していただければ、この上ない幸せです。

ここに至るまで、多くの県民の皆様のお力をいただきましたこと、ここに深く感謝申し上げる次第です。

(土田ヒロミ)

「シルクロードと東アジアの仏教美術」

《イベント報告》

「はるかなる時空をこえて」

昨年10月9日(土)から11月3日(水・祝)まで、ガンダーラから中国、朝鮮、日本の仏教美術を集めた展覧会を開催しました。広範囲な地域の仏教美術を集めた展覧会としては当館では初めてとあって、県内外はもとより外国からも観客が訪れ、熱心に作品を鑑賞していました。会期中に行ったイベントは次のとおりです。



- 講演会 [演題] 仏像の東伝
[講師] 田邊 三郎助氏
[日時] 10月24日(日) [場所] 当館講堂

本展覧会の監修者で、町田市立博物館長の田邊三郎助氏に、「仏像の東伝」と題して講演をいただきました。釈迦によってインドで興された仏教が、シルクロードを通り、中国、朝鮮、日本へと伝播していく過程と、それに伴って仏像がどのように生まれ、その表現が各地域や時代によってどのように変化していったかを、スライドや、展示作品についての解説を交えながら解りやすく説明していただきました。講演終了後多くの参加者から有意義な内容だったとの感想が届きました。



- 座談会 [演題] 古美術を語る
[出席者] 田島 充氏、伊藤 郁太郎氏、神山 繁氏
[日時] 10月31日(日) [場所] 当館講堂

「古美術を語る」というテーマで、福井出身で本展の開催にご協力いただいたロンドンギャラリー社長田島充氏と古くから親交が深い伊藤郁太郎氏、神山繁氏による対談を開催しました。

伊藤氏は安宅産業(株)で安宅コレクションの収集に携った方で現在は大阪市立東洋陶磁美術館の名誉館長、神山氏は現在も第一線で映画、テレビに活躍中の俳優です。

田島氏が福井で過ごした幼少時代から、美術商を志し多くの著名人たちと交わりを持ちながら成功されるまでの人間模様や三人の古美術に対する思いやエピソードなどが和やかに披露されました。



- 担当学芸員によるギャラリートーク 10月11日(月・祝)、11月3日(水・祝) 参加者合計約60名



サンフランシスコ・アジア美術館の佐野エミリー名誉館長(写真中央)も来館



講演中の田邊三郎助氏



座談会風景(右より神山氏、田島氏、伊藤氏)

特別寄稿

※「福井県立美術館もの知り事典」はお休みします

驚きの福井

渋谷区立松濤美術館長 村瀬 雅夫



今も恐らく日本の絵画が描かれる紙の9割、ほとんどが越前今立産だろう。竹内栖鳳、横山大観、川合玉堂ら近代巨匠達と紙漉職人岩野平三郎さんとの共同作業が原点にある。

画家の多様独自の手法に対応する近代画紙が続々登場し、「栖鳳紙」「雲肌麻紙」として今に至る。多くの和紙産地の中、素材改革に画家達が加わった歴史上稀有の地が福井であったのは驚きだろう。

1986年“世界のベストセラー”「プリニウスの博物誌」の初の日本語訳が出版された。ポンペイ噴火の救援に倒れたプリニウスの著作は、各国語版で広まり、活字印刷とともにルネサンス以後は一挙に芸術家必読の書になった。若狭高校長を最後に退職した中野定雄先生が生涯をかけた偉業だった。歴史的出版と福井のかかわりも驚きだろう。

ほぼ20年前、福井敦賀の西欧絵画コレクションとの出会いが福井の美術館とご縁になった。ロシア革命を逃れ、シベリ

ア鉄道、ナトク極東航路で日本へたどりついた人々は敦賀で荷物を整理した。多くの美術品も含まれた。買い取った材木屋さんが事務所に飾り、19世紀ウィーンの画家を含む数十点の西欧絵画が伝世した。倉敷に大原美術館が1930年開館する前後、西欧絵画を常時一般に公開していた日本最初の地は敦賀かも知れないと驚いた。その後敦賀では、戦前の広告チラシが大量に再発見された。18世紀末発明普及した石版画技法ははじめ自在に西欧版画技法が活用され、日本海の玄関口、港敦賀の歴史を支える商魂と先進の活力に驚いた。

最大の驚きは近代の大巨匠、狩野芳崖の「伏龍羅漢図」の再発見だった。明治18年(1885)、フェノロサ、岡倉天心が日本美術再興をめざし開いた第一回鑑画会大会に出品、絶賛された近代日本絵画の記念碑だ。その後一世紀行方不明だったが、福井の旧家で大切に保管され、福井県立美術館に寄贈された。天心ゆかりの地での発見も驚きだったが、修復された京都で軸装の共布が見つかり、アメリカー東京ー京都ー福井の来歴が判明した。

その後もまだまだ驚きは続いている。

(寄稿者の村瀬氏は平成3年度から15年度まで当館館長を務められました)

人の作家が、何時、どのような作品を制作したかを知ることは、その作家の表現の変遷や、特徴を探る上で極めて大切なことで、作家・作品研究のなかでも最重要視される部分です。近代以降の作家の場合ですと、展覧会の出品歴に始まる様々な記録や資料があり、また作品や箱に制作年代などが記されることもあって、比較的容易に把握することができます。しかし、古い時代になると、ほとんどの作家が地位の低いこともあり、記録のあること自体まれで、制作年代を示すものが残されることも少ないといえます。そのため、学芸員としては、現場に残された遺留品から犯人を突き止める警察官と同じように、作風や落款印章など、作品に残された様々な要素から、制作年代を掴むことに苦心せざるを得ません。

岩佐又兵衛(1578～1650)はその典型で、今に残される作品の多さや素晴らしさに比べ、活動を示す当時の記録はほとんど存在しません。また制作年代も現在判明しているのは、寛永17年(1640)、又兵衛63歳の時の作である「三十六歌仙図額」(埼玉・仙波東照宮蔵)一点のみです。そのため、又兵衛研究では、作品に捺される印章と作風の分類による作品編年が主要テーマの一つとなっています。

又兵衛の印は現在分かっているだけで6種類が確認され、その組み合わせによって、おおよその時代区分がなされています。そのうち楷書で「勝以」と刻んだ円い印章を捺した一群があります(図版

1)。この印は「道」と読まれる小さな印と共に使用され、当館所蔵品の「和漢故事説話図」(図版2)にも見られます。これまでの研究によって、又兵衛福井在住時代(1616頃～1637)のうち、松平忠昌が第三代福井藩主となる寛永元年(1624)から使用されたものと考えられています。しかしその下限については、又兵衛が江戸へ移る寛永14年(1637)以前までとさ

筆者不明の人物による業平の歌が書かれています。実はその歌の筆跡が江戸時代初期の公卿・鳥丸光広のものに近似しているのです。もしこれが真に光広自筆によるものだとすれば、光広没年の寛永15年(1638)までは、この印を使用していた可能性があるということになります。さらに、この書を光広がいつ頃書いたものかということも解明できれば、時

コラム 楷文「勝以」印の使用期間について

学芸員 戸田浩之



〔図版1〕 岩佐又兵衛勝以「和漢故事説話図 普武帝象車遊宴」



〔図版2〕

れるだけで判然としません。

しかし、それを知る手掛かりとなりうる作品はあります。『伊勢物語』の主人公で歌人でもある平安時代の人物在原業平を描いた「在原業平図」(出光美術館蔵)がそれです。歌仙図は又兵衛が得意とする画題の一つですが、本図はなかでも立ち姿を描いた数少ない作品です。画中には前述の勝以印が捺され、上部には

代をもっと絞り込むことができます。そうすれば、本図の位置づけが一層明確化し、ひいてはこの時代の又兵衛作品の変遷をもっと深く知ることができることになるでしょう。そのためには書の専門家を交えた研究が必要であり、これからの検討課題としたいと思っています。

福井県立美術館館蔵品紹介

北川健次『Diary I』

紙 エッチング
1974年 49.5×37.5cm



「北川健次展」は今年11月27日から当美術館で開催予定

北川健次(1952～)は福井市生まれの版画家である。多摩美術大学在学中に駒井哲郎から銅版画を学んだ後、写真製版による銅版画の技法を開拓し、棟方志功や池田満寿夫らに高く評価された。また早くから国内外の重要な美術展に出品を重ね、1975年には新冠23歳で現代日本美術展ブリヤストン美術館賞を受賞、1983年には第1回東京セントラル美術館版画大賞展で大賞を受賞し注目を浴びた。

さらに80年代末になると、箱状の空間の中に写真や様々なオブジェを緻密に配し、濃密で超現実的なイメージを構成する立体作品も発表し、版画と並んで自己表現を託す重要な形式とした。

現在、北川の作品を所蔵する館は海外も含めると24館におよび、またパリで開催されたアルチュール・ランボーをめぐる展覧会ではピカソやジャコメッティの作品と

もに出品されるなど、北川への評価は近年ますます高まっている。

本作品『Diary I』は、北川の初期の代表作のひとつで、22歳の時に制作されたものである。すでにこの頃から自己の完結した世界観を持ち、それを表現するための卓越したメチエ(技巧)を獲得している。

Diaryと題されているが、日記が描かれているわけではなく本来日記があるべき場所は漆黒に塗りつぶされている。北川は日記というものを記憶の深奥性や象徴性と捉え、中心にあるべき日記を周囲に埋め尽くした文字、記号、シミ等によって暗示して表現している。左上に見られる斜めの鋭い引っ掻き傷のようなものは、造形上の要請を満たしながらも、記憶の奥にある心の傷を暗示している。このような硬質で知的なイメージがかもし出す深く濃厚な文学性が北川作品の魅力であり特徴であるといえよう。

お知らせ

平成23年度から 実技講座の内容が一部変わります

これまでの「日本画」「洋画」「彫刻」から23年度は「日本画」「洋画」「素描(デッサン)・水彩画」となります。講座はこれまで同様基礎と専門の二つとし、各講座とも定員は20名です。

受講生の募集は3月1日から3月20日まで行います。

詳細は当館に備えてある募集要項やホームページをご覧ください。

平成23年度 会員募集のお知らせ

福井県立美術館 友の会

◎年会費 2,000円(一般) ◎特典多数有

福井県立美術館 ボランティアの会

◎年会費 1,000円(通信費)

詳しくは各事務局(電話番号はいずれも0776-25-0452)までお問い合わせください。

◎3月の休館日について

展示替え、館内メンテナンス等のため、次の日は休館とさせていただきますのでご了承ください。
3月14日(月)、28日(月)～31日(休)

貸館情報 [3/2～3/27]

3/2～3/6 ● 絵画グループ「写画瑠」作品展
3/10～3/13 ● 日本画60年の軌跡―湯浅満遺作展
3/11～3/13 ● 春をあなたに伝えたい―大久保柯舟書展
3/17～3/21 ● 第12回日象福井支部展

3/17～3/21 ● 四季彩―坂井敏之展
3/23～3/27 ● 第4回八百山登 日本画作品展
3/25～3/27 ● 第7回藤島高等学校書道部展

福井県立美術館 春の展覧会案内

2011年NHK大河ドラマ 特別展 ～姫たちの戦国～

会期◎平成23年4月22日(金)～5月29日(日)



「徳川秀忠室(浅井氏)画像(伝)」
東京大学史料編纂所蔵
(期間限定展示)
◎京都・養源院所蔵の江と伝える画像の模本。

戦国乱世から天下泰平へと向かう激動の時代を力強く生き抜いた一人の姫がいました。その名は江。

江(1573～1626)は、近江の戦国大名・浅井長政と織田信長の妹・市の中に三姉妹～長女は茶々(淀・豊臣秀吉側室)、次女は初(小浜藩主京極高次正室)～の三女として生まれました。生後間もなく父を、十歳の時には母とその再婚相手であった越前北庄城主・柴田勝家を戦で失います。

江はその後、2度の結婚を経て、最後は二代将軍・徳川秀忠の妻となり、二男五女をもうけますが、そのうち長男家光は三代将軍に、五女和子は御水尾天皇の女御となります。

本展は、2011年NHK大河ドラマ「江～姫たちの戦国」にあわせて企画、開催されるものです。江と江を取り巻く人々の遺品や歴史資料、約150点を展示し、江の波乱にとんだ生涯をたどります。



重要文化財
「青井戸茶碗 銘 柴田」
東京・根津美術館蔵
(通期展示)

◎江の義父・柴田勝家が織田信長から拝領した茶碗。福井に初の里帰り。



「崇源院宮殿」
東京・祐天寺蔵
(通期展示)

◎江の三回忌に、息子の忠長が造らせた江の位牌を納めた厨子。

県推進協議会キャラクター



お茶々ちゃん

お江ちゃん

お初ちゃん